55

『医学院学範』にみえる医学院の学習手順と畑黄山の儒書観

向　静静
立命館大学 立命館アジア・日本研究機構

畑黄山（1721–1804）は名を惟和，字柳安といい，黄山はその号であり，医官畑柳景の養子である．黄山は，1757年に法眼，1787年には法印に叙され，医学院という号を授けられた．1767年には後桜町天皇の侍医となっている．一方，彼は1784年に私財を投げうって京都に医学院を建てた．この医学院は，江戸の医学館に対抗するために建てられたという．しかし，医学院は1788年の火災によって類焼し，一時は門下二千とも三千ともいわれた畑医学院は，徐々に傾いていったとされる．

そうした黄山の著書には，『斥医断』『弁温疫論』『医学院学範』がある．実は吉益東洞と同じく古方派医家と称される黄山の医学思想は，東洞と極めて異なる一面を持っていた．本報告では，黄山の『医学院学範』を史料とし，医学院の学習手順及び黄山の儒書観を検討してみたい．

『医学院学範』とは，1786年に刊行されたものであり，そこでは中国歴代の医書が各科別に分類して記載されており，各医書に対する解説も付されている特徴がある．くわえて日本・朝鮮の医書，「蠻國醫法」についても論述されている．近世後期の医家である橘南谿（1753–1805）は『北窓瑣談』で黄山の『医学院学範』を「本邦の医書はわけて文盲不文なり．但賀川子玄の産論，畑柳安の医学院学範の二書，文章甚佳也．本邦医書中の第一の文章とすべし．其外の医書は唐土などへは渡しがたし」というように，黄山の『医学院学範』と賀川子玄（1700–1777）の『産論』（1765）両書の文章を「本邦医書中の第一」と高く評価している．もっとも，その評価が内容まで含むものかには，一応留保が必要だが，「文盲」による医書に比せば，より正しい医学書解釈に基づくものとみられていたことは間違いあるまい．

さらに，『医学院学範』には，当時の医学院における学習手順も記されている．つまり，医学院では毎日「卯」の時に医書が講じられ，「午」の時に儒経が講じられる．「講学」の後で，医学生らは「群籍歴史」を輪読する．夜には，学生らが「醫事方術」を習い，また討論・質問などを行う．さらに，毎月「策問」「射覆」「譯文」が行われ，医学生の「詩文」「醫事診候藥案」などを試す．諸生の「藥案」をめぐり，議論が行われた後，講師はコメント・批評をするといった学習スタイルであったことが分かる．

また，医学院では，儒経の学習が極めて重要視されていたことが看取される．例えば，『医学院学範』「医学院記」に「凡學醫者，必先讀聖賢之書，以立其本，本立然後學醫經，然後習方術」とあるように，「聖賢」の書を読んでその「本」を立ててから，医経を学び，さらに方術を習う，という手順が規定されている．そして，「聖賢」の書の学び方について黄山は『医学院学範・巻之一』にてこのように説いている．

> 治經者，以論語為先，學庸孝經孟子次之，五經又次之，當先讀古註曉漢儒古訓，而後讀朱註以領宋學之大意，而後又參考古義徵等以辯明異同，蓋聖經其旨高遠，非初學可能測也，唯要熟讀不怠，記誦不倦，講習討論，領其大意，若其判斷眾説以究精微，則非其所急也．

すなわち，黄山は，まず『論語』を学び，次に『大学』『中庸』『孝経』『孟子』を修め，さらに五経に進むという学習の順序を勧めている．くわえて，彼はまず，漢儒の「古訓」を知り，次に「朱註」をもって，宋学の大意を理解し，さらに伊藤仁斎『論語古義』，荻生徂徠『論語徵』などを参照するというように，経書を読む順序を述べた．当時，荻生徂徠・伊藤仁斎を代表とした古学派は多大な影響力を有していたが，黄山は決して古学派に限定せず，広く儒書を取り入れていたことが分かる．この特定の学派にとらわれない黄山の態度は，彼の医学にも表されている．「古方」に限定せず，広範な医書を学ぶ黄山の姿勢は，『医学院学範』を一瞥すれば明らかだろう．